

Title	書物におけるデジタルとアナログの歴史とこれから
Sub Title	
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami) 金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.9/10, No.1 (2023. 3) ,p.49- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	合併号 DMC TALK
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000009-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

【DMC TALK】

書物におけるデジタルとアナログの歴史とこれから

松田 隆美(慶應義塾大学文学部教授・DMC 研究センター研究員(元 DMC 所長)、

慶應義塾ミュージアム・コモنز(KeMCo)機構長)

金子 晋丈(慶應義塾大学工学部准教授・DMC 研究センター研究員)

※役職は対談当時のものです。



左：金子 晋丈 右：松田 隆美

金子：本日の DMC Talk は、文学部の松田先生にお越しいただいております。松田先生は、元 DMC の所長でいらっしゃいまして、DMC が研究機構から研究センターに改組されたときの初代の DMC 所長ということで、僕も当時から一緒に活動させてもらっていますけども、いろいろと学ぶところも多く、キャリアですね。これは、ご自身にご紹介をまずはいただきましょうか。松田先生、簡単に自己紹介をよろしく願います。

松田：文学部の松田隆美と申します。今、金子先生からご紹介いただいたように、DMC が機構から研究センターに生まれ変わったときに、何年間か最初の所長を務めさせていただきました。何故私がそういう役割を頂戴することになったのかというと、それ以前に、1996 年から十何年、断続的

に文化財のデジタル化に関わってきたからだと思います。文化財と言っても、私の専門は、ヨーロッパ中世の文学と書物史ですので、中世や初期近代のいわゆる貴重書や資料をデジタル化して研究に資するものにするのを、デジタルカメラの発展と足並みをそろえてやってきました。私は技術面を担っていたわけではなく、どういうコンテンツをデジタル化したらいいか、デジタル化により何ができるのかについて考えて提案してきました。そういう関わりがあって DMC との縁ができたということになります。私の研究は、デジタル化そのものではなくむしろ「もの」が中心で、中世の書物の内容とその形態から読み取れる中世の人々の人生観や死生観に研究の中心はあるのですが、そのための研究環境として、デジタルを常に意識しているところがあります。今は、DMC には、所長職はもっとふさわしい方にお譲りして、所員として関わ

らせていただいておりますが、一方で慶應義塾ミュージアム・コモンズ（通称 KeMCo）という、昨年新たにできたミュージアムの機構長を三田で務めております。

金子：ありがとうございます。DMC でデジタル化をバックグラウンドにして、デジタル技術というのをバックグラウンドにして、そもそも DMC という、機構時代のものも出来上がっていて。そこに面白いことに、全塾的な、別の表現をすると、いろんな分野のバックグラウンドを持った方々が DMC という組織に集まって活動していたというのが面白いところかなと思うんですけども。松田先生がデジタル化をしようと、取り組むもうと、もしくは、ご自身の研究の道具立てとしてデジタル技術を使おうと思われた背景というのは、どういうものがあったんでしょうか。

松田：そうですね。一つには非常に単純に、私の研究が、例えばイギリスの大英図書館にしかない、15世紀に書かれた手書きの写本を解読することが中心だったものですから、そのためには、大英図書館の前に住んでいれば毎日通って閲覧すればいいんですが、そうもいきません。1980年代、90年代には、マイクロフィルムを取り寄せて、それを図書館のマイクロフィルムリーダーで焼きつけて、読みにくい二値化された白黒画像を読むという資料との関わり方をしていました。それで、カラー撮影は非常に贅沢で、もちろんカラーで全部撮影してつくることはできますけど、大変な費用がかかる。何十万円という話になってしまう。だから、カラーのマイクロフィルムなんていうのは、本当に極めて貴重なものにしか

存在しない状況だったんですね。そこで、デジタルカメラが出てきて、デジタルで撮影して、それなりの解像度で、今考えると滑稽ですが、しかも最初からカラーである。しかも、なんと自宅のパソコンで見られるという。そうすると、やその便利さでまずは飛びついたということですね。便利なツールとしてのコピー機が出てきたときと同じような感動だったんだろうと思います。これを使ったらわざわざ大英図書館に行かなくても、マイクロフィルムを買わなくても自宅ですべて基礎調査、基礎となる資料の解読などができる訳です。ただ、こうした興奮は新しいおもちゃを買ったようなもので、けっこうすぐに冷めます。次は新たに手に入ったツールを使って、これまでできなかったことで、デジタルでできるものは何かを考え始めました。

金子：それはいつごろですか。

松田：義塾に『ゲーテンベルク聖書』が来たときに始まったプロジェクトなので、1996年ですね。HUMI プロジェクトという名前で始まりましたけれども、そこで初めてデジタル撮影をしたのが1996年で、今日のスタンダードではぜんぜん高精細ではありませんが、一応デジタルで『ゲーテンベルク聖書』を撮影しました。そうした撮影を1～2年続けるうちに、このコンテンツを使って何ができるのかを考え始め、その答えがなかなか出ないまま、答えが出ないというよりはいろいろな答えを天秤にかけてながら、どれが一番デジタルらしさを実体化できるかを考えました。それでデジタルでエディションをつくることを試みました。単に画像が高精細であるというだ

けではなく、高精細画像を使って、そのなかの文字情報だけではなくもっとパラテキスト的な、視覚的な情報—どんな色を使っているか、書体は何か、字の大きさはなど—も同時に情報として読み込むようなエディションを XML で作りました。それから、これも今なら当たり前ですけども、それをクラウドで—当時はクラウドなんて言葉はまだなかったかもしれませんが—共有をしながら、みんながそこに情報を書き込んでいって、だんだん解釈のレイヤーを重ねていくような、そういうデジタルじゃないとできない書物のかたちをいろいろ考えて実験してみました。自分なりに xml のタグをつくって書いてみたりとか、そんなことをしばらくやりましたね。デジタルでどういう文化財、書物研究の方法論が可能か、研究課題にどういうブレークスルーができるかなどを考えていると、なかなか答えが出ないままに年齢を重ねたと思います。

金子：今お伺いしていると、根本にあるてんびんの取り方というところに、ご専門にされている書物との比較というのが、常にデジタルで得られるメリットというものと、メリットというのが適切な表現かどうかかわからないですけど、価値というか。それを書物と常に比較されてその善しあしというのを判断されているのかな、なんて思ったんですけど、いかがですかね。

松田：そうですね。それは取っかかりというか、自分の興味と研究の中心に書物というものが一つあるので、先に研究素材としての書物があったところからデジタルに入っていったということがあります。そこから、「もの」としての書物と人間の関わり

はどういうものだろうか、読むという行為は具体的にどういうことなのか、見ることと読むことの境界線はどこにあるのだろうか、本が記憶に残るといえるのはどういうことなのかとか、そういうことを考えるようになりました。具体的にまず何か「もの」があって、その周囲にデジタルという環境を考えていくというアプローチでずっと来ましたので、書物にはアナログとデジタルの2つがあることを常に意識してきたと思います。



金子：実際に 1990 年代からかれこれ 30 年近くたつわけですけども、どうですか。当時、今の世の中を想像できていた人ってすごく少ないと思うんですけども。1990 年代当時に立って、今の世界観というのを、絶対にこうなるよ、みたいな、そういうふうに予想できている人って少ないと思うんですけども、その書物に対する価値観とか、デジタルに対する価値観とか、そういったところって、30 年という時代の変化と、一方で、松田先生ご自身がご経験された新しいデジタルデバイスとの、もしくはデジタルツールとのふれあい、および HUMI プロジェクト等々のいろんな研究プロジェクトを通してのご経験で、価値観って変わりましたか。

松田：私個人としては、漠然と書物に対して持っていた「もの」であるという感覚が、

デジタルが入ってくることで、より輪郭がはっきりしてきた感じがするんですよね。やっぱり書物ってこうなんじゃ、みたいな。

金子：「こう」を教えてください。

松田：本はどうしたら存在するのかということです。「もの」として一冊の本があれば、本がありますということはできるわけですよね。だけど、別な視点からすると、それを誰も読んでいなかったら、それは本ではなく、ただの紙の束じゃないか、と言うこともできます。読書という視点から見ると、こうした定義もできる訳です。誰も読まない本ははたして本なのかという疑問とともに、一方で、歴史のなかで過去に存在していたけど、今はもう残っていない本はいろいろあるわけです。英文学の有名な作品でも、中世の作品でも、もともとの写本は火事で燃えてしまったが、17世紀に誰かがたまたまそれを書き写していたから、今でも作品として残っているようなものもあります。だから、「もの」としての本はもうないけれど作品は存在している。それは本なのかどうか。どちらも本だと思うんですけども、そういうようなことを考えると、デジタルで「もの」という制約を離れて、テキストがどんどん展開していくという状況があり、それを本じゃないとは今は言わないですよね。eBOOKとか Kindle本とか、何と呼ぶにしても、皆それを本だと言っているわけです。漠然と本とはなにかと考えていたのが、デジタルの書物に誰でも同時アクセスするようになると、いろんなレベルでの再確認できたという気はします。

金子：ありがとうございます。今、お話をお伺いしながら、うちの父がですね、生物系の研究をやっている。特に分類という分野なんですけど。小さいころに話を聞いた、小さいころというのほうですね。分類には2種類あるんだと。生物の分類ですね。形態分類学というのと、生態分類学というのがあると。形態分類学というのは、動物の形状ですね。例えば、骨のかたちだとか、そういうふうな形状に注目して。一般的に分類するときに想像するようなやり方ですけども。それと、生態分類学というのは、どういう暮らしぶりをする生き物なのか。水のなかで生きるのかとか、どういうふうに巣をつくるのかとか、そういうふうな生態から分類にアプローチする。最近だと、遺伝子を見て分類するという方向にどんどん流れてきていますけれども。そういうふうな分類形態というのがあるというのを僕は知ったわけですが。今の本というものが、本というのはデジタルも、いわゆる書物も含めた意味での、先ほど Kindle本みたいなやつの本も含めて、広い意味での本というのも、2つの観点から考えていく、もしかしたら遺伝子的何か、みたいなものもあるかもしれませんが、そういうふうなものと非常によく似たことを、今、松田先生はおっしゃっているのかなというふうに思っています。生活のパターンとかがっていうのは、外形とは関係なく、例えば親から引き継がれていたりしますし、一方で形態というものは、ある種の遺伝子的な制約によってつくられている部分もあって。本も同じように形態的にもものとしての本、もしくはデジタルのストレージに入っているもの。デジタルの場合は、かたち、形態というのがなんなのかというのは、僕にもよくつかめて

いないですけども、どちらかという、生態側のコンテンツに近い側にすごく今フォーカスして、本というものが生き延びている。逆に言えば、形態というものの殻を脱ぎ捨てたような感じに思えるんですけども。そういうふうなイメージで捉えていいんですかね。



松田：それは的確な比喻だと思います。本を分類するとしたらどうするかというと、一番最初に皆が考えるのはやはり内容による分類で、これは小説だとか、これはノンフィクションだとか、これは数学の本だとか、これは哲学の本だとかで分類しようと思います。しかし、例えば図書館や書店では、本をいかに収蔵するかという視点が重要になると、大型本とか文庫本とか、サイズで分けたり、色々な分類があります。書物の形態学ということを考えると、さまざまな切り口がでてきます。今、金子さんのその話を伺っていて、本の場合で面白いと思うのは、書物の形態と内容はの相関性がなかなか複雑だという点です。例えば、Kindle で読む場合、どの本を読んでも形態は同じ、あるいは形態がないと言えます。形態は読者が決めることができ、自分が老眼かどうかでフォントの大きさも決められます。よくも悪くも同じ形態で、一人の読者にとって読みやすいという、1つの形態しかないと思います。しかし、「もの」としての書物の歴史を遡ってみると、例えば聖書ならば聖書固有の形態があり、その

結びつきが案外強いので、読まなくても本のレイアウトやデザインを見たら、これは聖書だとわかったりします。内容と形態という2つの分類のカテゴリーが混じっているのですが、それは生物にもいるかもしれませんね。

金子：でも、よく進化というものを議論するとき、僕が非常に不思議なのは、どこまでが遺伝子情報に含まれていて、どこからが生活のなか、いわゆる環境ですよ。環境のなかで変化していくのかというところ、今の話は本当にシンクロしているなと思いながらお話を聞いていて。例えば、それこそ『ゲーテンベルク聖書』みたいな話とか、もうちょっと下って行って、いろんな教会に聖書が置かれている。それって、すごく大きな形状をしていて、めくりながら、装丁とかもすごく美しくされているもの。一方で、今のビジネスホテルとかに置いてあるような聖書って、取りあえず文字情報は、細かく言うと違うと思いますけど、ほぼほぼ一緒の内容が書かれて、という。その形状の話と中身の話というのは、一種、形状というのは、使い道というか、よく DMC で議論させていただくのに出てきたコンテキストに非常に依存したものになっているし、そのコンテキストが中身を理解するときに、有用だったんではないかというふうにも思えてきて。デジタルというのは、先ほどおっしゃったように、フォントサイズを老眼だから変えられますというの、確かにユーザーに寄り添ってはいるけれども、それはいわゆる物理的なアクセシビリティを高めるというか。ということにとどまっていて、決してまだコンテキスト、置かれているシチュエーションに寄り

添ったかたちにはなっていないんじゃないかな、なんていうことを、今、頭のなかで考えていたんですけど。

松田：まさに私もそう思います。確かに本のかたちは使用目的に対応して変わるところがあります。書物の歴史では、持ち運ぶことが重視されるとだんだん本が小さくなる。あるいは、教会で説教やミサ、典礼をするときに聖書から朗読しますが、そのために大きな聖書があります。別に読むだけならどんなサイズでもいいんですが、やっぱり大きさはアピールするから大切です。今、教会で説教する聖職者でも Kindle で聖書を見ながらする人は少ないと思います。「もの」としてある存在感は大事です。電子ブックは、そういう物質的なコンテキストから人間を解放する、言い換えればコンテキストを無くしてしまうわけです。そうやって読む書物は記憶に残るかどうか、ということ私をよく話題にします。人間が情報を得るとき、情報との距離は毎回異なると思います。自分と情報とのつながり方、そのコンテキストが違うからこそ、情報は記憶に残ったり残らなかったりするのではないかな。距離に差が無く、eBOOK のようにあらゆる情報が均一に提供されると、かえって個人の記憶には残りにくくなるような気がします。オンラインで何か検索するときも同様で、複雑な情報でも検索を工夫して取得できるならば、情報への距離は短く均一化されつつあります。以前は特定の図書館に行って、そこで誰かに聞いて、この本ならば載っているかもしれないといったプロセスを重ねてようやく到達できた情報に、検索ワードをいくつかかけ合わせてすぐに到達できる。それはそれでメリット

はありますが、そのメリットを生かして使えるためには、情報までの距離はそれぞれに異なることを学ばないと、情報を本当に生かせる人間にならないような気がします。そういう意味で、アナログの書物の場合は、この情報は何ページぐらいにあったとか、前のほう、ページの上のほうにあったとか、小さな字だったとか、そうした距離感、身体感が人間の記憶を助けてくれます。そうした距離感をデジタルでどうリカバーできるのかということが、今まさにある課題なのかなと感じています。ちょっと話がそれましたが。

金子：いやいや、その情報との距離感って、僕は先ほどのコンテンツというものが、形態から離れていくことによって、逆にすごくのっぺりしたかたちの情報になっていて。記憶に残るということも一つあるんですけど、一方で、その情報がのっぺりしているが故に、自分のコンテキストに合っていない、合致していないにもかかわらず、それを勝手に受容してしまうというような弊害も起こっているのではないかなというふうに思っています。でも、根源的には、先ほど先生がおっしゃられたような、情報との距離感とか、その情報というのは、自分が受容すべきものなのか、もしくは受容すべきシチュエーションってどういうことなのかとか、そういったことを一切切忘れる。解放。いい意味の解放なのか、悪い意味の解放なのかわからない。それはちゃんと自分という価値観を持っている、もしくは判断基準を持っている人にとっては非常にありがたい話だけれども、一方で、それを持ち得ていない人にとっては、弊害にもなり得る話なのかな、なんて思っています。

松田：まさに、そういう情報が裸で直接飛び込んできて、どういう顔をしているのかわからないことの弊害が、今、あらゆるところで見えているという状況だと思います。変な言い方ですが、人はちゃんと服を着ていてほしいです。

金子：なるほど。でも、それは先ほどちょっと出てきた図書館とか、先生が書かれているミュージアムというものは、歴史的に見て、そういう情報との距離感というものがある程度整理したかたちで、お客さんに対して、来客者に対して、来館者に対して提示してきたというものだと思うんですね。先ほど大型本は大型本のコーナーに、みたいなのって、どうなんだろう。どういうのが理想の図書館というか、お客さんに対して情報を整理して出していく。そんな理想のものというのはいり得るのでしょうか。

松田：それはなかなか難しいと思います。以前の DMC のシンポジウムでもちょっと触れたことですが、ミュージアムの起源は、17世紀とかの珍品キャビネットと言われます。いろいろと珍しいものを集めてきて、一つの部屋とか、あるいは棚に収めるという、当時の、主に貴族の収集家の趣味から発展していったとされます。最初の収集方針とでも呼べるものは、curiosity、好奇心、珍しさにあります。これはある意味でそれまでの学問体系からの解放でもあります。どんなものでも、珍しければ、興味を引くものであれば集めてみる。ただ、同時に、珍しいものはしばしば植民地から持ち込まれたりしますから、この蒐集は、個々の「もの」本来の文化を無視した、植民地主

義による文脈の破壊とも言えるわけです。ミュージアムの始まりのところにパラドックスがあって、神学を頂点とした中世的な学問体系から解放されて、何でも注目に値するものを持つてくる自由は、同時に本来のコンテキストを破壊する訳です。その二面性は常に存在します。展示することで生まれるコンテキストは同時に既存のコンテキストを排除してしまいますが、そのパラドックスはミュージアムが常にかかえる課題のように思います。

金子：今のお話を聞いていると、ミュージアムというのは、それこそ珍品キャビネット時代のミュージアムというのは、僕もいくつか、前にお話ししたかもしれませんが、ミュージアムを巡っていくと、例えばカイロの博物館なんかは、ばっと、ただ並んでいるだけ。整理されていると言えるのは一部のコーナーのみ、みたいな。取りあえず見つかった遺跡を全部並べますとか。あとは、ロシア、あれはサンクトペテルブルクだったと思いますけれども、そこに老いてある動物系の博物館。剥製が並んでいるのも、本当にずらっとガラスのキャビネットにいっぱい並んでいるような感じのもので。それというのは、今おっしゃられたコンテキストの排除で、どういうところに住んでいたのかとか、例えば見つかった遺跡がどういうレイアウトで見つかったのかとか、それも散り散りばらばらにしています。でも、ものはそこにある。ものへのアクセシビリティはすごく高まっているというのは、デジタルが今書物からデジタル。先ほどのデジタル本という話で、作りあげている世界観に、非常に近いものを感じるんですよね。そこから一方で、ミュ

ージアムの発展の歴史を見ると、先ほど先生がおっしゃられた、生まれるコンテキストというか、キュレーターの方なり、ミュージアムの方々、学芸員の人たちが、そのコンテキストをつくりあげていくというか。それを展示に反映させていって理解を促すというような。そのきっかけ、変革のきっかけというのはどこにあったんですか。

松田：恐らくは従来型の展示で、例えば年代順や同じようなグループで並べてみるだけでは来館者も反応が多様化しないという気づきがあったのだらうと思います。それでも、それぞれに「もの」としての歴史があるので、その本来の文脈をデジタルコンテキストで提示すれば反応を引き出せるのではないかということで、従来ならば単にカタログやキャプションの説明文だったものを動画にしたりすることをいろいろと試みたんだと思います。ただ、そうしたことに関わった学芸員の方と話すと、そうした、所謂「フルコースディナー」は、せっかく作っても人気がないそうです。やはりもっとパーソナルな取っかかりの可能性を提供するようなかたちで、ミュージアムの展示コンテンツは展開される必要があるが、その実現をめぐるいろいろな試行錯誤になるようです。

金子：そうすると、ミュージアムだどものをやらないといけないし、物理的な制約もあるから、パーソナルミュージアムみたいな。あなたのためだけにこの展示室をしつらえました、みたいなのは、ほぼほぼ無理があるのかなというふうに思うんですけど。一方で、ある程度の万人に対して評価されるような展示じゃなくてもいいから、ある

少数の人たちに受けるというか、情報を受け取ってもらえるようなミュージアムというのが今日指されようとしているということなんですかね。

松田：個人と万人の間のどこで線を引いて、どのあたりのグループを具体的なターゲットとして想定するか、そうして想定された聴衆のイメージが明確なのは大事だと思います。つくる側にも見にくる側にも、そのイメージが一つあると、自分がどう関わるか、あるいは関わらないのかを考えやすくなるでしょう。

金子：そうすると今の話は、本でいうと形態に近いところをうまく見せてあげないと、パーソナライズしたようなそういう展示にも、やっぱり入ってきてくれないんじゃないかということですかね。

松田：書物に置き換えると、顔を持たせるということでしょうか。それは情報の出し方を工夫して、何を考えている本なのか、いかなる読者を意識しているのかなど、書物側から発信していくことが大切で、それをデジタルの書物でどうするかという課題です。デジタル、アナログそれぞれのやり方があるでしょうが、どちらか一方だけということはないだらうと思います。書物がもしほかのメディアと違うとするならば、デジタル、アナログどちらを指向しても、最終的にはハイブリッドなところに戻って来るといふことかもしれません。

金子：ハイブリッドな形態が何かというのは、まだ。

松田：それはいろいろあり得ると思いますが、同じ内容を印刷された本と Kindle の両方で読めるということだけではないだろうと思います。両方が共存していて、端末で読むけれども、同時に本の表紙ををなでているような、ハイブリッド感、書物というメディアの、ほかにはない特徴なのかもしれないと思ったりします。

金子：でも、よく IT の世界では、CPS でサイバーフィジカルのシステムをつくりましょうとか、最近のはやり言葉でデジタルツインをつくりましょう、みたいな感じでよく言われるんですけど。今までの絵って、鏡のように真ん中にデジタル世界と、アナログ世界を、物理的世界を分ける線が描かれていてというようなイメージなんですけど、今の先生のお話というのは、あいだは波打っているというか、ひだがあるというか。そこに相互にアナログ的情報と、デジタル的情報が浸透してくる。真ん中にわれわれ人間がいるみたいな。そんなイメージを僕は。

松田：そうですね。書物は恐らく色々な文化財のなかで一番最初にデジタル化されたものの一つだと思います。テキストだけと限定すれば、一番デジタル化というか電子化しやすかったと思うので。絵画や彫刻のデジタル化より前に書物だったと思うので、デジタルとアナログの間を往き来する歴史は、多少ほかのメディアより長いかもしれません。その結果として出てきたのが、これは書物が元来持っている本質なのかわかりませんが、今、金子さんがおっしゃったような、綺麗に線引きはできないという認識だと感じます。単に線引きができな

いだけじゃなくて、今日よくドラマなどで見かけるような、人間が持っている記憶を全部アバターに移してデジタルで同じものをもう一つ作るような、そういうことも実は書物の場合には出来ないのだという気があるように感じます。選択可能なデジタルとフィジカルではなくて、ハイブリッドの一つであるデジタルとフィジカルが書物なのかもしれません。逆に言うと、書物は百パーセントフィジカルにはもう戻れないでしょう。実際に読んでいる本が物理的な「もの」としての本だとしても、そのデジタルなかたちというのを意識しないで読書することは、我々はもうできないだろうと思います。Kindle だったらどう目に映るかどうか、どんな感覚で手におさまるのかということをおよそ大半の読者が経験済ですから、その記憶を消して本に戻ることはもはや出来ないでしょう。読者がもうハイブリッドになっていますから、どうかたちで本を読むにしても、ハイブリッドな存在として読むしかなく、そうすると、そうしたハイブリッドな読書に対応する書物のかたちが存在してくるのかと考えたりします。

金子：今のは考えさせられますね。今、先生は書物のお話をしていただきましたけど、先ほどのミュージアムの話、書物の話、デジタル化しやすいか、しにくいとか、そこに差異はあれども、すべて新しい情報を収集する、もしくは情報に接するというものだと考えたときに、その情報へのふれあい方というのが、相当いろんな影響を受けながら、あるべき姿というものが常につくられ続けているんだなと思って。

松田：そうですね。書物は、その歴史がどこまで遡れるかはともかく、例えば私が

知っている限りでは、ヨーロッパでは、古代末期から中世にかけて今のような冊子体の本が誕生しますが、そうした初期から本は非常に貴重なものでした。しかし同時に、テキストは情報ですから、同じ情報をなるべく広げようともしてきました。この2つの、必ずしも同時に実現はできない目標が最初から存在していたように思います。最初からデジタルとフィジカルのせめぎ合いのなかでしか、書物は存在していなかったかもしれない。ヨーロッパ中世は中世なりに、どうしたら同じものを量産して、同じコピーをなるべく多く正確かつ均等に配布できるかを考えて、分業でコピーするようなシステムを生み出します。そうした書物から情報を探し出す、いわゆる検索のための工夫も進みます。「労力なしに、速やかに、即座に行きつく」ことは中世の学術的情報検索のモットーでした。それはある意味デジタル化ですね。しかし同時に、一冊の書物にしかない個性も追求していこうとする。そのせめぎ合いのなかで本は常に存在していたように思います。それが、活版印刷機が出てきて同じ本を量産することが相対的に容易になり、そしてまた、今度は物理的に本を増やすことから解放されると、あらためて書物の本質は何かと、中世とおなじような問いを別なルートで考えているような気がします。

金子：すごくしっくりきました。

松田：そうですか。

金子：しっくりきました。別に、今に、このデジタル化という個別の技術というか、トレンドだから今考えているわけではなく

て、昔から延々とこの戦いは続いているんだと思うと、ああ、そうかと。人類が情報というものに対してどういうふうアクセスさせるか。そして、それを受容させるかということと戦い続けているのかと。

松田：そうなんですよね。ツールが違うだけで、同じような戦いをずっと続けているような気がしますよね。

金子：ありがとうございました。今日は、文学部の松田先生にお越しいただきました。本当にありがとうございました。

松田：いえいえ。私もいろいろ考えるきっかけをいただいて、ありがとうございました。

金子：1時間ぐらいしゃべりましたけど、取れ高的にはいい感じだと思いますけど。アーカイブの話にぜんぜんいかなかったんですけど。

松田：そうでしたね。

金子：それよりもいい話を僕は伺うことができたかなと思って。アーカイブは私的なものであると先生がよく言われている話で。それは、今度は個人の取り組みとしての情報の、受容側の、もしくは記憶に残すという。受け取り手側の試みなのかなというふうにも。

松田：そうなんですよ。アーカイブの話をして、結局、今日のような話に落ち着いてしまったかもしれません。使う側から考えると、アーカイブは非常に個人的なもの

だと思います。それは、自分のなかでどこにどう情報をストレージするかという、脳内記憶みたいな話と関わってきますし、いずれにせよ、個人が想像するアーカイブは3次元的で立体的なものです。それは「もの」としての書物のかたちと呼応すると思います。一冊の本なのか、一つのアーカイブなのかという、形態の違いはあっても、立体的な距離感みたいなもので構成されていることは変わらないのではないかと、そんなことを漠然と考えてはいました。

金子：今日お話を伺った内容って、僕のなかでは、発信者目線というか。情報を有している側がどういうふうにその情報を提供していくかみたいな話で。一方でアーカイブというのは、受け取った側がそれをどういうふうに記憶にとどめるために工夫するのかという話で。面白いなと思うのは、今、どの家に行っても、本棚というものがあるんですよね。家具として。これは、本というものが、やっぱり発信者側と受け手側の橋渡しをしていて、それを受容する設備としての、もしくは受容する枠組みとしての本棚というのが、今どこにでも存在しているというのはすごいことだなと思ったんですよ。デジタルを考えたときに、この送信側のやり口と、われわれ個人個人が情報をどう整理するかって、今、そんなにきれいにマッチしているかなと思って。デジタルテクノロジーの本当につくらないといけないのは、この真ん中の媒介する部分なんじゃないかと。その形状が決まってくることによって、どういうふうにデジタルで情報を保存して、もしくはどういうふうにデジタルで情報を発信してあげればいいのかというのが決まるんじゃないかな、なんてことを、今、ふと。

松田：なるほど。確かに、それは別の言い方をすると、本のかたちをどうするかという、最初の話に戻ります。読み手と書き手の両方がいないと書物は成立しないと考えると、本は両者を媒介するものであって、それはどのような形態をしているのでしょうか。海外ドラマに出てくるリビングルームには、住人が誰かに関係なくたいてい本棚があって、それはインテリアのひとつとして存在しているのですが、そういう場面を視ていると、先に本棚ありきだから本が存在するのかもしれないと思うこともあります。

金子：どっちが先なんですか。

松田：どっちが先なんだろうね。本が先だろうと思いがちですが、案外わからないんじゃないかと思います。

金子：僕は、今は家ですけども、矢上の教室はですね、普通の大学の先生だったら、本棚を入れると思うんですけども。オフィス器具として。けっこうたくさんだから、絶対本がばっとなるんですけど。決意をして、本棚を買わない決意をしました。机の上に並べる程度なものが、一応トランディションフェーズなので、いろんな学事のなんちゃらとか配られてくるから、そういうのを置いておかないと困るから、そのぐらいは置くんですけど、でもそれは机の上に置く程度で、残りはなしにしようという決意をしたんですね。

松田：それは面白いですね。重野先生の研究室は、よく Zoom の会議で映りますが、

文系の私などと変わらない本の多さですね。
金子：だからデジタルで受け取って保存する。置いておいても、そんなに見るか、見返すかとかと思ったときに、見返さないだろうと思って。会議とかで資料とかを配られますけれども、それも、別に僕が持っている必要はないよね。欲しくなったら学事なり、事務サイドに言えば絶対に保管してあるから。じゃあそれを僕が持つておく必要はないよねと。こんな限られた狭いスペースを、あえてストックに使う必要はないだろうと。もし必要なものがあつたら、それこそデジタル化、紙だったらデジタル化するし、PDF だったら PDF で Google Drive かなんかに挙げておけば、ほかのスペースは広がるぞと思って。それでそんなアプローチをしたんですけど。でも、どう整理をしたらいいのかとか、やっぱりそこは課題ですよ。どんどんパソコンも変わっていくし、Google Drive はけっこうパソコンの更新に対して強いので、安心感は持てますけど。整理の基準を、ときどき本数が一定量を超え始めると、どだい無理な話ですけど、少ないときって、ちょっと並べ替えたりとかしたくなかった記憶が、僕はあるんですけど。やっぱりそういうところも、デジタルで一個一個見ながらフォルダ一構成を変えてというの。

松田：それは、あと1年で研究室を空けなくてはいけないというタイムリミットがある私には切実なんです。「もの」として持っていたい本はどれかと最近よく考えるんですよ。内容もですが、この程度のアクセス数ならばデジタルでもいいが、やはり「もの」として本棚に並べておきたいとか。昔は単純で、スペースさえあれば本は全部

並べのが前提で、スペースがないから仕方なくデジタル版を買う、あるいはデジタルのほうが電車のなかとかどこでも読めるからデジタル版を買うけど、同時に印刷された版も買ってちゃんと本棚に置いておいたんです。しかし最近、スペースとは関係なく、デジタルがいい本と持っていたい本の区別があるということを考えて決断が出来ずにいます。

金子：でも、そういうのが何世代か繰り返されると、きっと新しい、さっきのなんかが見つかってくる。ありがとうございます。

松田：とんでもないです。

金子：でも、今最後の部分も、最近ですね、本編と余談みたいな感じの構成になっていて。余談としても非常にいい感じで。僕も考えさせられました。本当にありがとうございます。

松田：本の整理学を、呼び名は少し変えて、何人かで座談会のようにするとそれはそれで面白いかもしれません。

金子：面白いですよ。本当に情報というのは、かたちを変えますよね。それが厄介ですよ。自分の脳みそのなかでの位置づけがぴょんぴょん変わるから、それを記憶術として。昔はそんなに情報が変わらなかったんですかね。

松田：確かに手書き写本の時代を通じて、書物制作も流通形態も根本的に変化しましたし、同じく印刷本の時代でもやは

り何百年か大きく変化しなかったのですが、それがここ 50 年ぐらいいろいろ変化して、次はどこへ行くかわからないような状況がちょっとありますね。

金子：よくこういった時代って、ロストジェネレーションとか、なんて言えばいいのかかわからないですけど、失われた時間みたいな感じに、何も残らない。失われた時間みたいに言われるじゃないですか。デジタルにして、ちゃんと保存していないと。

松田：そうですね。

金子：この記憶が残らねえんだ、みたいな話になりますけど。実際に活版印刷が出てくる辺りの変革期って、残らなかったわけじゃないんですよね。

松田：どんどん本が印刷されてしまって、情報がありすぎて何も覚えていない状況、それに対する危機感があったようです。朝日新聞に、デジタル情報を取り込みすぎてダイエットしなきゃ駄目だという、デジタルダイエットの話が出ていました。同じようなことが印刷本が始まったときにはあったと思います。

金子：その辺りの話も聞きたいですね。

松田：その辺は、僕ももう少し歴史的に勉強したいと思っているところです。

金子：なるほど。ぜひ便乗で申し訳ないですけど、教えてください。

松田：DMC の書物系チームでやると面白いかもしれないですね。

金子：面白いですね。僕も興味があります。前にイケダ先生とお話をしていたときに、『ゲーテンベルク聖書』が出てきて、活版印刷が出てきて、世の中がごたごたした時間とか、その技術が浸透するのにかかった時間をおおよそ聞いたんですよ。デジタルとあまり変わらない。もっと昔だから時間がかかっているのかと思ったら、すごく一気にシフトチェンジとか、していて。そうか、そうかと。同じような時間感覚なのか、何がデジタルがドッグイヤーだ、なんちゃらだと言ってはいますが、そんなことは何も昔から変わっていねえんだとか言って。

松田：そうだと思います。活版印刷がヨーロッパ中に浸透していく早さを最初知ったときには驚きました。あっという間に広がって、出版者が雨後の筍のように生まれて、倒産したりしている。このスピード感は今とあまり変わらないという印象がありました。歴史の時間感覚はいつも同じではないんです。何かが動くときは、短時間に大きく変化するという、歴史の怖さみたいなことを感じました。

金子：そうするとあれですかね。デジタルももう、本棚ができているのかもしれないですね。そうやってぱっとできたら、それは消費者がいるということなので、消費者がそれをどういうふうにストックするか。最初は大事そうに家のなかで飾っていたかもしれないけど。数が増えてくると、じゃあ平置きじゃなくて、背表紙を見せるか、みたいな感じになったんだとすると、じゃあそのくらいのときに本棚かって。もうすでにデジタルだったら、それはデジタル本

棚、デジタル棚。わからないですけど。

松田：デジタル本棚みたいなアプリはないんでしょうか、もうありそうな気がします。

金子：たぶんかすかにその形跡はあるのかもしれないですけど、どれが本命なのかわからないですよ。そういう意味では、形状がそろっていないですよ。画像ファイルは画像ファイルとか。テキストはテキストとかって、ばらばらになっちゃっている。ありがとうございました。

松田：どうもありがとうございました。

松田 隆美 (まつだ たかみ)

慶應義塾大学文学部教授・DMC 研究センター研究員 (元 DMC 所長)、慶應義塾ミュージアム・コモンズ (KeMCo) 機構長。専門は中世英文学、表象文化史、書物史。慶應義塾大学における一連の稀覯書デジタル化・研究プロジェクトに継続的に関わっている。主要業績:『ヴィジュアル・リーディング——西洋中世におけるテキストとパラテキスト』(ありな書房、2010 年)、『ロンドン物語——メトロポリスを巡るイギリス文学の 700 年』(共編著、慶應義塾大学出版会、2011 年)。

金子 晋丈 (かねこ くにたけ)

慶應義塾大学理工学部准教授・DMC 研究センター研究員。専門はアプリケーション指向ネットワーク。特に、デジタルデータの利活用を促すデジタルデータのネットワーク化について研究を行っている。2001 年東京大学卒業。2006 年同大学院情報理工学系研究科博士課程終了、博士 (情報理工学)。同大学院新領域創成科学研究科での特任助教を経て、2006 年 9 月より慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ総合研究機構、特別研究助教。2007 年、同機構特別研究講師。2012 年 4 月より現職、デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター研究員を兼任。

※役職は対談当時のものです。